

# 活躍する専門技術者に聞く ⑩

こんどう  
近藤

ひろあき  
浩章

氏(株式会社辰巳菱機)

第10回となる今回は、乾式負荷試験装置の開発メーカーとして知られる株式会社辰巳菱機（東京都江東区）に所属し、30年以上に渡り、発電設備の据付工事及び負荷試験業務に従事してこられた近藤浩章（58歳）氏を紹介する。ご自身の経験や自家発電界に対する想いをお聞きした。

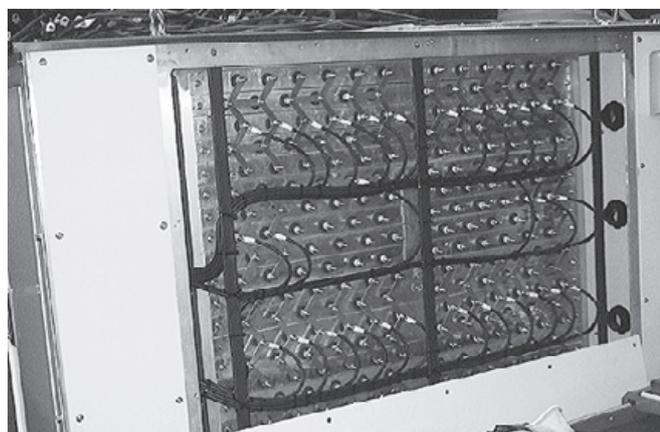
## 1. 五感を活かした診断

近藤さんは大学卒業後、実父である近藤博氏が経営する株式会社辰巳菱機に入社した。

「経営規模がまだ家内工業の域でしたので、父や兄（豊嗣氏、現：代表取締役社長）の作業の手伝いと事務から始めました。大学は政経学部で、本当は商社マンか教師になりたかった。正直発電機の仕事に興味は無く、心中は悶々としていました。」

入社時期が非常用発電設備の設置が義務付けられた昭和49年の消防法改正から間もないこともあり、同社にも設置工事の受注が大量に舞い込んできた。

「上司は職人気質の技術人で、例えば配管の切断も鉄管の硬さを確かめるため、通常パイプマシンで自動切上げするのを、わざわざ手でねじ切りしていました。また、エンジンの調子も柄の長いドライバーの一端を排気管に押し当て、もう一端を耳に当ててエンジン音を確認したり、五感をフルに活用した職人技を色々伝授してもらいました。」



辰巳菱機が開発した乾式負荷試験装置(低圧800kW)



こんどう・ひろあき 58歳 東京都出身

## 2. 現場での失敗談

「失敗談ですが、消防検査の前日に、燃料配管の鋳物製のフランジの『増締め』をした時、加減が分からず強く締めて、フランジが割れてボルトもねじ切ってしまいました。その結果、翌日の検査も延期となり、所轄署の方をはじめご迷惑をお掛けしたことを覚えています。」

入社後、実務経験を積みながら技術資格の取得にも励み、自家用発電設備専門技術者資格（S、K、Mの三部門）に加え、第一種電気工事士や二級管工事施工管理技士を取得、特種電気工事士の資格も保有している。

平成25年度には、発電設備の現場施工等に関し、豊富な実績と卓越した技能を備えている点が高い評価を受けて、国土交通大臣顕彰による「建設マスター（電気工）」を受賞した。



現場の第一線に立って施工する近藤さん



電気の仕事を通じ顧客や社会に安全・安心を提供

### 3. 現場責任者として

昭和60年、近藤さんは、据付工事の現場を任せられる様になった。主な施工実績は以下のとおり。

- ・ 大学病院（東京都港区） 800kW×1基  
ガスタービン機関駆動防災用発電設備
- ・ 電算センター（東京都江東区） 1,600kW×2基  
ガスタービン機関駆動防災用発電設備
- ・ 消防署（東京都品川区） 120kW×1基  
ディーゼル機関駆動防災用発電設備
- ・ ポンプ場（東京都港区） 200kW×1基  
ディーゼル機関駆動防災用発電設備

特に印象深かった物件として、平成元年に施工した明石大橋及び平成3年に施工した関西国際空港の建設工事用発電所をあげられた。

「海面に浮かべたフロートに可搬形発電設備を4台設置し、工事用電源に接続する作業を行いました。取扱説明も含め3ヶ月間の滞在でしたが、明石大橋ではしけの日もあり作業に苦労する中、鯛の群れが海面を泳いでいるのを見かけたりすると、癒されたりもしました。」

また、通信設備の非常用電源工事では、山間奥地で発電機の設置工事も多く手掛けた。

「森林を切り拓き山頂に設置するのですが、東北

### 4. 顧客意識の変化

近藤さんは据付工事とともに、平成7年に辰巳菱機が製品化した「乾式負荷試験装置」を用いた発電設備の負荷試験業務も実施している。

「当社では防災用発電設備の保守も数多く請け負っています。負荷試験を含めた保守サービスの必要性について、ご理解頂けない施主様も沢山いらっしゃいます。」

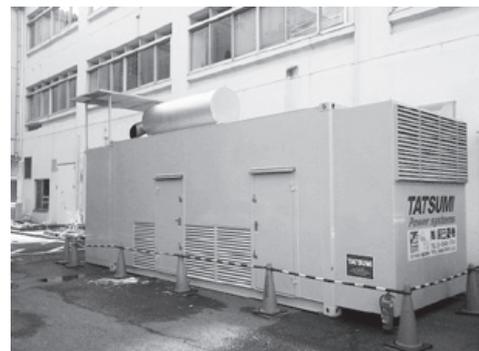
しかしながら、最近では、顧客の防災意識の高まりも実感しているという。

「東日本大震災の発生や、南海トラフ地震の可能性が高まる中、点検計画の提案に際し了承してもらえる例が増えてきました。費用のかかる負荷試験の実施に対して、その重要性を認め、費用負担を受け入れるなど施主側の意識の変化が出ているのを感じます。」

なお、辰巳電機では、保守点検時の負荷運転試験の実施を促進するため、同社が中心となって設立した「一般社団法人日本エネルギー設備保安推進協会」を通じて、発電設備の導入者に対し、メンテナンスの重要性を積極的に啓蒙し、日本の“あんしん”を推進している。



発電設備を載せ浄水場(仙台市)に到着した自社車両



自社所有の発電設備(1,000kVA)



雨雪が降る中、発電設備を被災地まで運んだ



震災翌日3月12日に着いた宮城県石巻市の風景

## 5. 電力の大切さを実感

平成23年に発生した東日本大震災においては、知人からの依頼を受けて、電力の途絶えた被災地に兄の社長とともに、近藤さんらもトラックに乗り込み、発電機を無償で提供し、設置作業も行った。

「石巻市でしたが、500kVAと150kVAの発電機を持って避難所の仮設電源作業に行ってきました。震災の翌日3月12日の朝、現地に到着したのですが、本当に寒かった。ヒーターの代わりとして持参した自社製の乾式負荷試験装置も大活躍しました。食料品も配り、多少でも他人様のお役に立っていることが直接感じられ、自分の今までやってきた仕事が認められた様で、若い頃からの職業選択に対する迷いは払拭されました。」

大急ぎで発電機の設置を行うとともに、照明器具やコンセントなどの負荷設備の設置工事を行った。

近藤さんはその後も被災地には何度も足を運んでいる。



自家発業界への想いを語る近藤さん

## 6. 自家発業界を想う

最後に、今後の自家発業界のあり方についてお聞きした。「山間や離島での仕事も多いので、最近は自然環境への配慮や地球環境の保全について強く意識しますね。内燃力発電設備と、太陽熱や風力など自然エネルギーシステムが一体的に調和を保ちながら活用が進められ、社会が発展していくことが必要だと思います。」

内燃力発電設備の工事・保守に従事する方へのアドバイスをお聞きした。「内燃力発電設備は、電気設備として分類されることが多いのですが、実際の設置現場では、エンジン側の調整が作業内容の多くを占めています。非常電源の中でも特殊な設備だと



発電設備の建屋基礎工事で指導する近藤さん

思います。『電気の知識を持ち機械の経験も積む』それが大事なことと思います。」



辰巳菱機は平成25年、東京都江東区との間で「災害時の電源供給に関する協定」を締結した。広域停電となった際、自社の大型発電機の提供により、区役所や避難所等の電源供給にあたるという。地域社会の安全確保と、自然環境との調和の両立を目指し、その先頭に立ち活躍する近藤さんの行動力に感銘を受けた。